

弱さを見せるカリスマ

橋爪大三郎×上田紀行

なぜカリスマなのか

橋爪 カリスマと聞いてまず思い浮かぶのは、マックス・ウェーバーです。二十世紀最大の社会学者である彼が、なぜカリスマに注目したのか。

ウェーバーのテーマは、近代資本主義社会の成り立ちは、どのような根拠にもとづいているかということでした。たとえば「資本主義を立ち上げた行為様式（エートス）は、プロテスタンティズムの倫理である」と、補助線を引いた。

現代の政治システムにはさまざまなものがあります。そこで、なぜこのシステムが正しくて人びとに支持されているのかと

いう根拠の問題、つまり正統性の問題が出てくる。ところが民主主義は形式上循環することになっていて、手続きが正しければ正統である、その手続きを決めたのは正統な立法手続きである——これだと正統性の証明が成り立たなくて、困るわけです。この不可解な謎を、ウェーバーは『支配の諸類型』のなかで、正統論というかたちで解きほぐそうとした。そしてさらに深く、正統性の循環が発する初発の沸騰状態みたいなものに興味を持ったのです。正統性がうみだされる可能な根拠のひとつが、カリスマだというわけです。

ウェーバーがカリスマの典型と考えたの

カリスマ的でありえないからだ、わたしは理解しています。

上田 支配の正統性は伝統的支配からカリスマ的支配に行き、合理的・立法的支配に向かう。つまりウェーバーは支配における正統性の三類型は循環する、経巡っていくといったわけですね。

人類学的に言えば採集狩猟社会は平等社会であるということが知られていて、強い権力も貧富の差も、ほとんど発生していない。だからリーダーにしても、いわゆるカリスマといえるようなリーダーではないんです。そこから農耕社会に入ってタテへの分化が始まってくる。つまり貧富の差が出て、ルーマンもいうように個人的属性よりも地位が優越する社会になっていく。強力な資本の集積も出てきて、呼応する形で政治的・宗教的カリスマも要請されてくる。

カリスマとは、ある種こぢんまりした全人的に人がかかわる社会から、タテ方向への分化がはじまってから要求されたものです。ウェーバーが着目したのは、農耕社会から現代の民衆社会へと繋ぐミッシング・リンクとしてでしょうね。ただ、なぜそれがカリスマでなければならなかったのかと

いうことになります。

橋爪 カリスマに興味をひかれたのは、ウェーバーが、十九世紀の近代的・個人主義的社会の中で文化教養を身につけた人間だから、という気がしますね。逆に、こう考えてみましょう、カリスマでないものは、じゃあ何か。

ひとつは、「管理」である。法による支配、厳密なルール、手続きでもよいのですが、要するに、すべての人間がそれに絡まされて身動きがとれないものことです。「前例がない」「このあいだの会議でこう決まった」などと言われて、イエス・キリストがはいそうですかと従うようでは、カリスマになんかなりつこないわけです。近代社会は基本的に、規則・管理によって社会関係を調整している。現実社会で、カリスマ的に行動する人はめったに見えません。

もうひとつは「伝統」です。近代的ではないが、いかんともしがたい慣習の塊のようなもの。やんごとなき家柄だからと威張っている人がいたりするのがそれです。すべての資源が伝統によって割り振られている。たとえば傑出した個人的能力をそなえた

は、イエス・キリストだと思う。

イエスは政治哲学・政治倫理を示したようでも示していない。しかし逆に、示していないようでも示している。イエスは政治的人物ではありませんでした。イエスの非政治的・個人的魅力がキリスト教という運動を立ち上げて、そこから西洋文明のさまざまな側面がうみだされた。すると、ビッグバンのように、個人の魅力、個人の属性に制度的問題がすべて還元されるような最初の発火点があると考えられる。これを社会的に一般化して、ウェーバーはカリスマと呼んだ。ウェーバーがカリスマにひき寄せられたのは、逆説的ですが、現代社会が

人物が出現したとしても、ただの平民であれば、ほかの人を押しつけてたちまちパワーを持つ、なんていうことはありえない。

近代社会がうまれるためには、邪魔になる伝統を喰い破らなければならない。近代への移行の力学はどうやって説明すればいいのか。これを説明できなければ、近代化そのものが説明できない——近代の側からはこのように見えるわけです。そこで封建時代の末期や近世の初頭に、社会の流動状態が生まれ、伝統を喰い破って運動を組織した個人、リーダーが現れたはずだと想像した。ほんとにそうだったかどうかは別にして。ルターとかクロムウェルとか。

しかしこれは、いわば「隣の芝生」効果なんです。垣根を越えた隣の芝生は青く、自分の居場所とは違ってよく見える。散文的な近代に生きたウェーバーが、伝統を喰い破った前近代の個人に与えた名前が、カリスマではないでしょうか。

上田 だからウェーバーにとっては、カリスマはあくまでも理念型として措定されているものなわけですよ。散文的な伝統社会から散文的な近代社会には直接接合はできない。その間には「濃い」カリスマがい



上田紀行氏

たのではないか、ウェーバーがそう考えてしまったというのはわかるような気がします。

カリスマと距離性

上田 人類学的にカリスマを考えていくと、それはある種の神秘化です。そのためには社会という舞台装置の中で、舞台裏という空間がまずなければならぬ。誰にも見えない背景にこそ神秘が潜んでいるわけですから。しかし、小集団で狩猟採集をやっていた社会では、誰もが舞台裏を見てしまっていた。そこでは人間に対して神秘化を行ったり、何らかの超常的な力が凝縮されたりすることはありえない。だからカリスマ

の発生とは、舞台の表からは見えない裏側に超常的な力があるに違いないというような、舞台装置の発生とともにあるわけですね。

ところが近代の民主主義社会はアカウンタビリティの社会で、すべての舞台裏を見せなければいけないことになっている。ところがその舞台裏は可視化された舞台裏で、実は舞台上に乗っている劇中劇の舞台裏のようなものです。本当の舞台裏はシステムとして見えない構造になっていて、舞台に乗っているわれわれは隠された力のようなもので動かされていると感じているわけですね。だけどそれが何なのかよく分からない。それは伝統社会の散文化とはまた違った、近代の散文化ともいえます。われわれはどこかで舞台裏が「隠されている」と思っている。隠蔽されたものがありつつ、日常世界は散文的になっているという感覚がある。伝統社会のカリスマのような非日常性、まさに舞台そのものを発生させたような聖なるものが指定され、それが合理化されて近代に移行するという考えにはその意味で頷けるんです。

では現代にカリスマはないのかといえ

ば、逆にそれを求めている部分もある。つまり、合理化されたが故に不可視化され、隠蔽された部分にフィットするようなカリスマを、近代人は求めているのではないでしょうか。橋爪 狩猟採集社会の散文化は、舞台裏のなさ、すべての人がお互いをよく知っているということでしょう。現代社会の散文化は、すべての人がお互いを、充分個人的には知らないというところに成り立つわけで、構造が違っています。

狩猟採集社会ではたしかにすべてが見えています。それは、人間ならざるものたちのドラマ（コスモロジー）がこの世界をしつらえてきたとする一種の「秘密」が公開されている感じなんですね。現代に生きるわたしたちにはもう、そういう神話は無い。あるのは科学、宗教、哲学です。ぶつ切りになった知識が、書物など公開されたかたちで散文的に存在する。神秘的なものの行き場がない。神秘的なものは共有されたストーリーとしてではなく、個人の内面や背後にあるもの、不可思議なオカルティズムなど、どこかにあって探されるものになってしまった。行方不明になっているんです。となれば、それがもう少しましな



橋爪大三郎氏

たちで近代以前にはあったに違いない、とする考えも出てくる。ロマン主義がそうです。並行関係と非並行関係の両方がある。似ているところと違うところがあるということです。

イエスの登場した当時は、知っている者しかない農村も流動化し、都会も形成されていった。イエスは歩き回って、都会の知らない人にも大勢会っています。そういう状況を想像する一助になるのは、「イエスは故郷に受け容れられなかった」とする福音書の記述です（マタイ十三章、マルコ十六章、ルカ四章）。イエスが故郷ナザレの町へ戻って説教をすると、「大工のヨセフの息子じゃないか」とか「なんだ偉そうに」

とか村人にいろいろ言われる。子供の頃のことをよく知っているので、村人は、イエスのカリスマ性を理解できないんですね。結局イエスは「預言者は故郷に受け容れられないものだ」と言ってナザレを後にします。預言者にとって都合の悪いエピソードなので、それがあえて福音書に残されているというところは、現実起こった出来事ではないのか。イエスを育んだ散文化的な小さな村落社会と、イエスを預言者たらしめたイスラエルのなかば都市化された大衆社会とのあいだに、落差があるんです。この落差が、カリスマが出現するひとつの条件なんじゃないか。

上田さんだって経験があると思うけれど、ここらへん（大岡山のキャンパス）を歩いているぶんにはただの上田紀行ですが、地方に講演旅行などに行くと「東京から偉い先生がやってきた」と、周囲一メートル以内にはみんな近づかない、なんてこともあるだろう。その手の落差の経験はありますか？

上田 それはありますね。東工大では仕事のできない、しがない大学教師なんです（笑）、行くところに行けばある種のカリスマ

マのように扱われたりする。まあ橋爪大三郎の信奉者から「あの先生と一緒に大学院で教えているんですか」と尊敬されることもありますが。（笑）つまり、社会のなかでの距離性が重要なんです。カリスマは共同体の成員全員が故郷で一生を終るところではなかなか発生しない。都市化され、そのなかでメディアを流れていく情報が成立したとき、噂が噂を呼ぶような状況になってはじめてカリスマは出現する。

現代のカリスマがマスコミによって作り上げられていく文脈のなかでは、多くの人が「それはおかしいじゃないか」と言ったり、真性のカリスマとマスコミがセットアップする贗のカリスマとの違いをあげたりする。しかし、そもそもメディア「噂」人々の期待がカリスマを形成しているのであるから、メディアによって作り上げられたカリスマを、それだけで贗物と呼ぶには当たらないわけだ。

橋爪 メディアは、間接的な人間と人間との関係を作り出す手段ですね。

これはカリスマを作り出す大きな要因です。もしある人を知るのに、直接触れるしか手段がないのなら、それは故郷から一歩

も外に出ない人たちと変わらないことになる。大工のヨセフの息子は一生大工の息子です。

ところが間接的な人間関係となれば、ある凄い人物に会ったという人がいて、その人物がいかに凄いかを、知らない人に言ってしまう。言ってしまうという当人も、凄い人物を知っているというわけで、ちょっとだけ凄くなる。じつはこれ、鶏と卵の関係です。凄い人物が本当にいるから凄いという噂が広まるのか、凄い凄いと言ってまわる人がいるからそういう凄い人物が本当にいたことになるのか。どっちが動機でどっちが結果か、判断できない。

メディアの場合もこれとある程度似ていて、直接本人に接触しにくいというのが大事な点なんです。ちょっと見えるだけで、本人のことをよく知ることができない。だからもともと知りたいとばかりに、写真をたくさん撮ったり、動静を追っかけたり、関連書を読んだり、グッズをコレクションしたりする。受け手の側が空虚感を抱くかたちになっており、その空虚が生産されている。これはまさに、メディアの仕掛ける罠です。

る。この「復活」が面白い。

そして極めつけは、パウロはイエスに会ったこともないということです。パウロはあるときイエスを見て目が見えなくなり、洗礼を受けてまた見えるようになった。それから彼は猛烈な布教を開始します。その手段が旅なのはもちろんですが、面白いのは手紙を使ったということです。手紙を受け取ったものは、それをみんなの前で読み聞かせる。そのパウロの背後にはイエスの教えがあり、しかしパウロ自身はイエスに会ったことはない。回心したときに見ただけ。そういう手紙をもらった人は、どうやってもイエスには会いに行けない。それにこのイエスは、パウロが想像したイエスかもしれない。つまり、本人の魅力がパウロのトリックかわからないんです。こうした一種の仕掛けが、キリスト教に弾みをつけた。福音書の数々の章句を読むにつけ、イエスは、後世の批判にたえるカリスマとしての資質をそなえていたとは思いますが、それが「キリスト教」になった理由は、それがメディア化したからではないでしょうか。

上田 ウェーバーに戻りますと、彼のカリ

上田 カリスマは、すべての人がすべての情報にアクセスでき、コスモロジーを共有しているような、ある意味で充実した形で均質であった世界から、情報における中心と周縁という構造が成立するようになってはじめて誕生したといえるでしょう。中心と周縁は社会の作り出した装置ですが、中心にカリスマがいて取り巻きがそれを宣伝し、いかに自分が中心に近いかを含意することによって地位を上げていくというシステムです。周縁に追いやられていく人は、拒否するか、あるいは自分も中心に向かって歩いていくか、どちらかの選択を迫られる。

面白いのは、中心と周縁という構造ができて、人々の意識が変わったことです。身体的儀礼的なものに裏打ちされたコスモロジーが誰にでも実感できたところから、都市に異文化が対立し合うなかで根無し草のような自分、コスモロジーを感じできない自分が変わり、意味の疎外のような状況が人間に生まれた。自らが疎外されているという意識から、中心にはきつと充実した世界があると仮定した意識構造が生まれたのでしょうか。もっともその意識が生まれたか

スマ論の重要な点は、カリスマに個人的魅力があるのももちろんだが、それをカリスマだと認める人々がいて初めて、その人物はカリスマになるのだといったことです。よね。

橋爪 その通りです。

上田 つまりウェーバーはカリスマ本人よりも、その人をカリスマだと認めて御輿に担ぐ人々の存在を重要視しているのではないのでしょうか。つまりカリスマ本人と仕掛けの部分はそもそも切り離せないということです。イエスのこの広告代理店効果のようなものは彼だけではなくて、預言者と言われる人たちにはすべて社会的状況における民衆の側の要請があったように思います。現代のいわゆる贗カリスマにしても、民衆のカリスマ待望があつて、いわば仕掛けのなかで登場している。

橋爪 カリスマが個人の特性であることはもちろんですが、ポイントはその人物の周囲に、それを受け容れる熱狂の渦巻きがあることです。どちらが根本かというところ、社会状況として重要なのは周囲の人びとなんです。たしかにウェーバーの論理構造はそうなっています。

らカリスマが成立したのか、カリスマが成立する素地がもととあつたのか、それこそどちらが先かはわかりませんね。

カリスマと贗カリスマ

橋爪 本物の「カリスマ」現象と、メディアが仕組んだ「擬似カリスマ」現象を区別できるのか。

ウェーバーの定義によれば、カリスマの根源は、個人的魅力でしょう。メディアの特性によるものではない。だから本人に会ってもそのカリスマ性は失われることはない。むしろ本人に会えば会うほど、その不思議な魅力にのめり込んでいくというのが、本物のカリスマなんじゃないか。

イエスのことを考えると、弟子たちやぞろぞろつき従う人びとがかなりいて、イエスの話を聞いて涙を流したりしている。だから話半分としても、彼自身にある程度の魅力があつたのはたしかでしょう。十字架にかかるまではこの状態で、そのあといったん、この集団が壊れてしまう。それから再組織される。そのときイエスはいないわけで、本人に接触できないんです。けれどもいつそう深い構造となつて、再生してく

カリスマはメディアが生んだ

橋爪 個人は属性をとりあげてみても、凡庸な人間が大部分ですが、たまに例外もあり、誰が見てもカリスマチックだという非凡な人間がいる。これは時代を超えて、常にある現象ではないかと思うわけです。それなら、カリスマの時代になったりならなかったりというのは、当人ではなくフォロワーの心性のなかに、カリスマに感応する社会的背景があるかないかという問題になる。

カリスマの時代が到来するかどうかは、フォロワーの問題、もつと言えばメディアの問題なのだと思います。パウロの時代には、手紙・福音書・伝記が書かれてましたが、もちろんこれは文字の存在に負っている。さらに下って、印刷術。さらに下って、映画があり、ラジオがあり、テレビがある。そして現在はインターネットの到来です。

上田 到達速度の問題がありますね。文字なしで人々が語り伝えていくだけでは非常に遅い。また遠近感の問題もある。遠さが力になるんですね。遠くから来たもののほうが有り難いわけで、そもそも有り難いも

のでなければ遠くから到達してこないと考えられる。この遅さや遠近感が、インターネットによって喪失させられてしまった。即時的になったのは、それこそ脱カリスマの現象のように見えます。カリスマ性を減じさせるのは間違いない。さきほどの、情報から閉ざされているほうがカリスマへの期待をいや増すとするならば、現代のインターネット社会はカリスマを最も発生させない社会のはずです。

ところが現実には、その社会のなかでカリスマ待望論が起こったり、日常用語として使われたりするわけですよ。美容師や店員やラーメン屋とかの上に「カリスマ」の文字がつくような状況は何を表しているのか。

橋爪 狩猟採集の時代、共同体間の交流がごく限定されていたとするとどうなるか。そういう無文字社会の場合、カリスマ的な傑出した人物が現れて噂になっても、しばらく伝達されているうちに、神話と区別できなくなってしまう。神話的世界に投影され、自分たちとは違った神々のカテゴリーに容易に溶け込んでしまう。ところが文字があると、何年何月何日にどこその

誰がこう行動した、と記録できるので、どんなに噂になっても神話には溶け込まない。メディア社会では、神話と区別された「偉大な人間」の話として、カリスマ化しうることになる。

上田 無文字社会だと語り部が必要になります。つまり即時的に語り伝えることができないんです。そこでは人格化するよりも神話化しやすいのは当然です。何しろ、そのカリスマが生きている間には、その存在自体を知ることができなかったりもする。神話化されてしまえばカリスマにはならない。カリスマにはアクセシビリティが、同時代性が必要ですから。同時代性がありつつも、若干隔てられていなければならぬ。しかしあまり近すぎていけない。その間隙を縫っていくところにカリスマはある。橋爪 昔は、広い範囲の人びとを同じ理由で興奮させる機会は、ごく限られていました。農耕社会は、お互い切り離されて孤立しても生存できる、自給型のメカニズムでした。共同利害が少ないから、情報も少ない。そこでは、よほど特異な問題がない限り、カリスマという現象は発生しにくかったでしょう。

上田 特異な問題、それは飢饉、戦争など人間の悲劇にどう対応するかという問題ですね。

橋爪 目に見える範囲の社会が、自分の生存を許容し、将来に希望が持てるもので、とりたてて問題がなければ、カリスマを待望する必要がない。目に見える範囲の人びとが自分を助けてくれず、もはや誰にもどうしようもない状態になつてはじめて、カリスマが必要になる。この世界を超越して抜け出る方法を探して教えてくれる人物が必要な状況が、どの共同体にも起こった場合に「そういう人物がいませんか」という伝言ゲームが発生したかもしれないということです。「いたらしい」「いや、いた」「本当にいた！」。

上田 問題が合理性の範囲内で解決するならば、カリスマは要らないわけですよ。それを越えた、絶望、苦悩こそがカリスマを要請する。

舞台裏の弱さを見せる

橋爪 カリスマの特質は、人びとの苦悩を理解しながら、ものともしないという点です。苦悩を別のものに変えてしまう特異な

パーソナリティの持ち主、ということになる。

上田 カリスマのパーソナリティは前近代、近代、現代では変わってきているような気がします。さきほど舞台裏の話をしました。舞台裏を神秘化する人間が前近代型のカリスマだとすれば、ポスト近代のカリスマは舞台裏もそっくり見せてしまう。散文化した現代社会にあって、自らのヴァルネブル(vulnerable)なところを見せてしまう人物がカリスマ化するのではないか。

たとえば学生に「いまカリスマは誰か」と訊くと、「ビートたけし」という答えが返ってくる。小カリスマが分立する現代で、彼はたしかに大きめのカリスマかもしれない。テレビでは王の如く振る舞っていないが

ら、その裏側で自分自身でもメディアやシステムに使われているのか使っているのかわからない存在であることを自覚しているふしがある。自らがシステムに使われている自覚とは、それ以前のタイプのカリスマ、「俺は強いんだ」といつて舞台裏を隠し神秘化するものにとつては、最大の脱カリスマ、異化作用でしょう。ところが逆に舞台裏を見せることが現代ではカリスマになりうるということです。

オウム真理教の麻原彰晃にしても、むしろこの新しいタイプに属するのではないでしょう。か。「ラーメンが大好きだ」とかワイドショーなどは彼の弱みを盛んに報道しました。しかしそれは彼が舞台裏を見せていくカリスマであるという証明でしかない

と思う。カリスマのパーソナリティは変化しているわけです。

橋爪 プレ近代から近代にかけてのカリスマと、テレビ出現以降のポスト近代のカリスマのあり方が、反対になっているのではないかといいことですね。

映画の時代にはカリスマでなく、「スター」と呼んでいた。星のごとく遠くにあり、しかし実生活は謎で、神話化されている。原節子なんかそうです。映画は、大都会のロードショーから二番館、三番館、村の一軒しかない映画館へと次々に波及していく。どこでも同じ映画が上映されているけれど、中心から周縁に波及し、時間が遅れ画質も落ちていく。周縁から見ると、中心に少しも近づいていくほど文化のレベルは上が

り、富も教養も高くなるように見えた。東京、ニューヨーク、ハリウッド、パリと、光の当たる場所に近づくのです。

同時代の同時刻に、でも遠くに、具体的な希望がある。自分のまわりがすべて否定すべきものだとしても、その向こうにはバラ色の世界がある。これが、近代化が進行するプロセスなんです。同時刻のどこかに散文的な日常ではなくロマンに満ちた桃源郷があるというメンタリティは、夜空の彼方に輝く星のイメージです。カリスマがスターという形を取ったのはこのせいでしょう。文学や音楽や政治なども、こういうロマン的な心性を隠している。レーニンやスターリンやサルトルも、結構、スターなんです。

日本で言えば一九七〇年ごろを境にして、生活が平準化して「一億総中流」となり、宮台真司さんの言う「終わりのなき日常」が始まった。空間的に世界は均一で、どこまで行っても新しいものはない。時間的にも同様で、過去はいざ知らず将来に向かって行っても、本質的に新しいものはない。ロマンの心性を投影すべき、具体的場所がないんです。すべての場所は、自分のいま

の間のコミュニケーションにおいて共通の言語が流通していませんよ。

「アナクロ派」と「まったり派」

橋爪 同じ後期産業社会の日本を生きながら、タイプとしては、いわば「アナクロ派」と「まったり派」の二つしかない。どちらも相手を軽蔑しながら、自分自身のあり方にも満足していないところがあって、大衆現象はその上で起こっている。

わたしの若いころ、「まったり派」はいませんでした。やや遅れて彼らが現れ、あつと言つ間に「まったり派」がマジヨリテイになるかと思えたが、いまはまた均衡していますね。どちらがよりリアリティがあるか。それぞれ自分のほうがリアルだと言っているが、実はどっちとも言えない気がする。

それはなぜか。世界の状況と関係があります。

社会主義圏が崩壊し冷戦が終わったとはいえ、いま世界では、これからしばらく、第三世界の人口爆発が止まることがない。映画スターがいたころと同じ、輝ける中心と取り残された周縁という構図が、まだ残

るこの散文的な現実と同じ。メディアにたまたま、スターになっても不思議のない素質の人物が登場したとしても、その人物だって、自分と同じ散文的現実を生きているにすぎないと、まず思ってしまう。大衆（視聴者）の側に嫉妬による脱神話化、一種の引き剥がし作用の衝動が起こってくる。「ヘブバーンのようにになりたい」とスターに憧れ、スターと同一化することで自分を引き上げようなんて、いまは誰も思いません。逆に、スターを引きずりおろしてしまふ。こういう力学の転換が起こったのではないか。

この段階になると、舞台裏を明かす人物でなければ生き残れないんです。上田さんの言う「ビートたけし」型の人ですね。そういう人物が、メディア世界にもっとも適合する。ただその人物はメディアのなかで「オレはこういう役柄は合わないんじゃないか」とどぎまぎしながら、舞台裏を見せなければならぬ。それがまた、支持される理由になるんです。

上田 中心に近づけば桃源郷があつて幸福になれる、人生の究極の意味が明かされるとされてきたけれども、その社会自体の物

っているんです。いや、ますます強くなっているかもしれない。そうすると、アメリカは憎まれる。アメリカは繁栄の中心で、じつはうらやましいんです。反米運動が起こるところは必ず、アメリカに大きな魅力を感じている。

そうすると、アナクロニズムのもっているリアリティだって、否定できないということになる。反米テロにしても「まったり派」でなく「アナクロ派」的な動機で理解できる。いっぽう「まったり派」から見ても、自己破壊的現象だからよく理解できて興奮すると同時に、「まったり派」の帰結そのものと思えてしまう。

そこで、オウム真理教はどう考えられるか。彼らは「まったり派」のなれの果てで、散文的です。空間的にも時間的にも、世界の果てまで終わりのなき日常が続いていて、自分は何をしたらいいかわからず、この世界に何のロマン的感情も持てない。そんなときオウムは、自分のなかのロマン性に小さな共同体のかたちを与えてくれるんです。そしてその中心人物を、本物のカリスマだと思ひ、新しい同心円を描き出してしまう。自分は結構中心にいるんじゃないか、そし

語が、今は失われているんです。

ここで二つの戦略がある。ひとつは中心と周縁というアーキタイプを復活させようとするもの。もうひとつはカリスマを日常に引きずりおろそうとするもの。この選択肢のなかで、しかし後者ではなく前者をめざす人も、実はいなくなつたわけではないんです。つまり舞台裏を持った教祖に惹かれる人もいるし、強い物語を求める人だってまだまだ多いわけですよ。でも舞台裏を見せてしまふ教祖に惹かれる人は、アーキタイプの教祖に憧れる人を非難するんですよ。『あなたたちは古くさい、ダサイ』『まだユートピアがあると思っている大馬鹿者だ』などといったりする。まあ、さっきの宮台さんはこちらのほうですね。そうすると「まったり派」と呼んでもいい。

(笑)

ところがその「まったり派」の信奉者たちは、自分たちもカリスマを求めていることについてはあまり自覚的ではないんですね。それどころか、自分が現代の教祖と言われて喜んでしまふ人もいます。

古いタイプから見ると逆に彼らはバカな漂流者に見えるわけで。いまは二つの勢力

で「まったり」そのものも嘘じゃないかと思ふようになり、その中心にどかんと穴を開けてしまおうとする。これがテロルです。オウムがそういう衝動を持っていたとすると、「まったり派」の人びとも同じ衝動があることになる。オウムの事件が起こったとき、「先にやられた」とか「俺もこんなことやったかもしれない」とか、さまざまな波紋を呼んだのはそのためです。

反米テロは、アナクロ側にしてみれば、起こるべくして起こつた出来事です。「まったり派」にしても、終わりのなき日常に終末のイメージを与えてくれる衝撃的な事件です。どちらの人びともおのおの文脈で解釈して、今この時代を迎えているんじゃないか。

上田 例えば宮台さんはオウムのテロを、これは物語を求めてしまふ人たちの事件で「まったり」生きられない愚かな人たちが起こしたことだと言つたわけですよ。だから最初から「まったり」生きればいんだよとコメントしてましたね。しかし彼のその後の迷走状態を考えるに、じつは彼は本質的にはまったく「まったり派」じゃない。戦略的に「まったり」を求めてそこ

に意味を与えてしまう人なんです。戦略的「まったり派」なんて、そもそも根本的に矛盾している。(笑)つまり「人生に意味はない」「世界に意味はない」と断言する人ほど、人生や世界に過剰な意味を与えている人はいないわけ。市井人は小さなことに意味を与えてそこに一喜一憂しながら生きてゆく。一方で過剰に物語を求めて「アナクロ派」として生きていく人もいる。「意味はない」と言っている人たちはその一方で最大の物語を形成しているのに、そのことが自覚されていないという不幸がある。わたしは「ない」と「ある」は断言してしまうときには両方同じだと思っています。デジタルな意味ではね。そういう意味では結局、反対に「ない」という人ほど強烈に「ある」を意識していることになる。

宮台さんがその後奇立ったのはそのことに気づいたからじゃないかと思えます。彼の立場を堅持していくのはかなり強い主体性が必要であって、それは多分「まったり」などという生易しいものではないんじゃないでしょうか。

橋爪 上田さんの話で本質を衝いていると思うのは、「まったりした日常を生きる」

右肩上がりの状況がその神の正当性を証明していたわけですね。ところが成長が止まり、終わらない日常状態になった現代、カリスマ像はどうなっていくのか。舞台裏を見せつつ、しかし神秘性を確保していくカリスマ像の行方が気になりますね。

橋爪 カリスマは、カリスマを意識する周囲の同時代人に、微細に記述されることが多い。ではカリスマ本人にとって、自分はどう見えているのか。じつは本人には、自分がカリスマとも何とも見えてないと思うんです。ある意味で自意識が希薄で、世界と自我が奇妙に一体化している。つぎつぎにやるべきことを思いついて、アイデアや行為が爆発しつづけている。こういうシンブルな類型の人が、周囲にカリスマとうつ

という言明は、倫理的で、ロマン的な命題だということ。となると、「まったり」という認識そのものも、すでにある種のロマン性を孕んでいるんじゃないか。その認識自体がそもそも、純粋な「まったり」じゃない。もしも完璧な「まったり」人間がどこかにいたなら、それは庶民と呼ばれていた人びとだろう。でも彼らは、自分を取り巻く状況が時間的・空間的に継続し、終わりがないとは思っておらず、単に自分の小宇宙で、日常を生きている。遠方にどんなドラマがあっても、それは一幕の風景にしか見えない。自分自身の人生と大きな連関はないと達観してられるんです。

ところがこの情報化時代、達観することは困難です。コンビニに行ってもインターネットを見ても、情報は自分の一部分となってしまう。朝歯ブラシで歯を磨いたこととブッシュ大統領の演説とが、まったく等価の情報になってしまふんです。いわば「まったり」自身、先進国のメディア状況を与えている仮想現実なんです。マインド・コントロールが大きなトピックになってしまふのも、すべてが仮想だという「ま

ると思うんです。しかし、そのことを本人が意識すると、たちまちカリスマ性は失せてしまふでしょう。もつともこれは、本来のカリスマの場合ですね。

「ビートたけし」のような現代のカリスマは、逆にそれを意識し、戦略に織り込んでいる。それが「照れ」になって、「かわい」とかの副次的効果を生んでいるのでしょう。もともとのアーキタイプのカリスマには、その種の自意識がないんじゃないか。上田 墜ちたタイプのカリスマとしての麻原彰晃の場合は、かなりの自意識があったわけですね。一般には、彼はみんなを洗脳した悪者で、かわいそうな子羊たちを悪の方向に導き、サリンを撒かせたとされています。しかし実は違うんじゃないでしょ

「つたり」の感覚と共鳴するところがあるからです。「まったり」効果とは、現実ではなくメディアの状況が、本人にそういう時空間のあり方をバーチャルに見せているということなんです。

でもこう言うと「アナクロ派」は、「そういう状況は中心でだけ起こっているものであって、周縁には全然「まったり」な空間なんか形成されていないよ」と、逆襲するでしょうね。

カリスマ像はどうなるか

上田 カリスマには時代の神が乗っている。だから時代によって乗っている神も微妙に異なってくるわけです。たとえば戦争状態では將軍がカリスマになる。国民国家ができたときのカリスマ、高度経済成長時代のカリスマと、それぞれ神は違う。

例えば高度経済成長時代の日本では、カリスマといえば松下幸之助であつたり、本田宗一郎であつたりもしたわけでしょう。お金と豊かさを増していくことに絶対善を見た前者と、絶えざる技術革新に一生を捧げた後者。その高度経済成長時代、彼らにはたしかに神が乗っていたと思うんです。

うか。彼はサービス精神が旺盛で、周囲の人々の「奇跡を起こしてください」「カリスマとして立ってください」という期待に応えようとしたんじゃないのかな。となると、どちらがどちらを洗脳したのかも微妙な問題です。それはむしろ相互洗脳状態ともいふべき状態で、麻原が洗脳した以上に信者が麻原を洗脳して奉ったんじゃないか。そういう意味で彼は期待を真に受けて、その期待感を裏切らないように行動していたとも言える。まあ、カリスマと周囲の人間の共存状態ですね。

橋爪さんのいわれたアーキタイプのカリスマの場合は、世界と一緒に呼吸していることを疑わない人物ですね。世界に敵がいるとかそういうことはどうでもいい人物。

自分のやることはすべてそのままそれでいいんだと考え、計算高いところのない人物でしょう。啓示のままに生き、何をするべきかもその啓示のままにひらめく。こういうとまるで芸術家みたいなカリスマになりますね。本人が本当にそうかどうかはともかくとして、メディアからうかがえる長嶋茂雄なんていうのは、このタイプのカリスマですよね。まあ、巨人は負けてしまったけど。

橋爪 軍人で言えば、それは直感的ひらめきとなる。なぜ勝利が得られるかわからないけれど、適切な判断が瞬時にできる。部下も心服しているので、彼の言うがまますみやかに動き、とにかく勝ってしまう。

「予言の自己成就」型です。それは、芸術家で言えば、直感がひらめきどんどん新しいアイデアが湧いて出て、当然成功するということ。そういうストリートさが、本物のカリスマの必須条件ではないか。

上田 わたしはさきほど世界との呼吸感といいましたが、靈感つまりインスピレーションの、スピレーションの部分は呼吸するという意味です。スピリット、霊というのは呼吸という単語と同根なんです。ここ

ろがオウムの場合とかは世界と一緒に呼吸することができないがゆえに、周りの人間とつくりあげた仮想世界のなかで呼吸しなければならぬ。外は毒ガスが撒かれていて、サティアンの中のみが清浄な空気で満たされている。それはある意味では、見えないシステムが舞台裏としてあって、それによってわれわれが抑圧されているのではないかという、現代人の不安の表出であって、その意味で麻原はやはり現代の小カリスマではある。信者との共依存的なところも現代的。しかし、現代の病理をそのまま負ったカリスマで、そこには救済はなかった。

もうひとつのリアリティへの覚醒

橋爪 現状ではインターネットなどの高度科学技術によって、世界大の情報相互連結は後戻りがきかず、進む一方です。世界にそれだけの情報装置が組み込まれていると、カリスマのあり方も当然変わってくる。ラジオ放送が始まったころ、元伍長で絵描きのなり損ない、アウトロー寸前の夢想家が、手練手管でカリスマになった。当時テレビがあつたら、ヒトラーはカリスマ的独

う現代的な「まったり状況」と、イスラム原理主義という「アナクロ派」が重なったところに出てきたカリスマがビンラーディンだということ。彼をカリスマというのなら、現代の矛盾をよく表したカリスマだというしかない。しかしビンラーディンの金の儲け方がグローバル資本主義に依っているのであれば、彼はビル・ゲイツを批判できないはず。

橋爪 ビンラーディンはアメリカというシステムの鬼子で、その懐から這い出している状況なんです。もうひとつの対抗原理を立てた「本物」のムハンマドなどとは比べものにならないのは、おっしゃるとおりです。ただひとつ気になる点は、情報化しているのは確かにそうなんです。ただテロルの本質は、実際の加害行為、物理的な破壊行為をとまなうことなんです。みんなが恐がり、そういうことをした奴だ、しそうな奴だという情報のやりとりのなかでカリスマになり上がっていく。いわば手形小切手をばらまいているわけけれども、それが実際に落ちるだけの、実物としての暴力を本人が実行していない点が、普通のカリス

マと違うような気がする。それは麻原にも言えることで、どす黒い内面の闇によって悪事を人に押しつけてしまうけれども、実行犯にはならない。

上田 ただ、WTCが破壊されたことで、グローバル資本主義を謳歌していたアメリカ人も、やはり世界には遠近感があることに気づいたんじゃないかと思えます。彼らはこれまで常に勝ち組で、気づいていなかったわけでしょう。自分に近い風景が破壊されたときに、自分自身の存在の基盤さえ危うくなるような存在感の剝奪が起こるということ。

アメリカが湾岸戦争やコソボ、まあコソボはNATOだけれども、空爆をガンガン行ってきたわけですね。しかし、空爆されてホームランドがぐちゃぐちゃになったとき、そこに住む人々がどのように根無し草の状況に陥るかを気づくべきなんです。テロリストの破壊自体はもちろ悪い。しかし遠近感をアメリカ人に示唆したことだけは評価できるんじゃないか。恐らくはビンラーディンが思った以上に、文明的意味があつた。しかしこういう問題がありますかね。

裁者になれなかったらうとも言われています。

ではこの電腦時代に、カリスマは復活するのか。あるいは、変容するのか。あるいは、「まったりした日常」にその先があるのか。どうでしょう？ たとえば、ビンラーディンなどは、ある種のカリスマ的威力をもっているわけですが。

上田 均質化され遠近感がなくなった社会のなかで、ビンラーディンはまだ遠近感はあるんだと言っているわけですね。まだ社会には濃淡があり中心と周縁があると強烈に主張しているわけです。「おまえたちには俺たちは周縁に見えるだろう、だが俺たちにとってはおまえたちこそが周縁なんだ」という。しかしながら彼自身、遠近感なき世界でヘッジファンドを食い物にして資産を形成している。それが現代のカリスマをネガティブな形で体現しているように思えます。

現代の資本主義は、情報化された資本主義です。つまり物流の資本主義ではなく、マウスをクリックすればニューヨーク市場から東京市場へとお金をいかようにも一瞬に動かせる。そして資本主義の情報化とい

橋爪 効果はあつた、で止めておけばいい。

上田 でも、アメリカ人はどうか、ブッシュは懲りてないですね。またアフガンでも空爆でしょう。

橋爪 アメリカのグローバルイゼーションは、「金ぴか」だったけれども、やはり一種の「まったり」だったのかなと思いますね。アメリカはまったく悪くない、資本主義には何の問題もない。ほかの連中がアメリカに追いついてこないのは、十分に文化的でなかったり、民主的でなかったり、キリスト教的でなかったりする彼らのせいだ、となる。これは散文的な世界なんです、それがロマン化されていて、世俗的なもののなかに熱狂的な何かを見つけるのが人生の目的である、というサクセス・ストーリーをアメリカは組み立てていた。しかしその象徴が射ち抜かれたとなれば、それは世界が、もうひとつのリアリティに覚醒するチャンスだと受け止めることができるかもしれない。

この点はいろいろに言えるが、たとえば日本で「まったり派」と「アナクロ派」の論争があつたでしょう。「アナクロ派」は右も左もいるが、「まったり派」はどちら

でもない。そして若者を二分したり、リアルを二分したりしていた。これは、どちらが正しいということじゃなく、この世界は「まったり派」もリアルだし、「アナクロ派」もそれなりの根拠を持つんです。両方の伯仲状況こそが、本当のリアルではないのか。この伯仲状態を受け止めることのほうが、もう一歩リアルに近いことになる。

アメリカに即して言えば、グローバリゼーションのアメリカニズムも否定しがたい運動であるけれど、それに対するリアクション、アンチグローバリズムの批判的運動も否定しがたい。その伯仲状況が、よりリアルな世界であるということ、アメリカ人も一歩下がって、率直に認めるべきです。そうになると、中心があるわけでもなく、ないわけでもない。カリスマがいるわけでもないが、いないわけでもない。どっちつかずの複雑な状況なんです。

上田 断片的なアイデンティティがたくさんある。たとえばインターネットでの会話ではたぐさんの顔が持てます。ある種の多重人格状態で、仮面のように顔を取り替えてさまざまなサイトに書き込んだりする。こういったアイデンティティのあり方が

「まったり派」ですね。もう一方で、わたしはこうだ、と断言したいという部分が人間にはあって、「日本国民である」とかの単一のアイデンティティに帰して行きたくなる。となると、それは中心と周縁や境界という「アナクロ」的なものを要請せざるを得ない。従来はそれが完全に二分されていたと思うんです。コミュニティアンとりバタリアンの争いもそうだし、本質主義と構成主義の対立もそうですね。

しかしほくは、その二つのどちらかのみに固定化されるのではなく、人生のなかでグラデュアルに二つのモードの間を動く、あるいは動く可能性のある存在が人間ではないかと思っているんですね。あるときは「アナクロ」になり、あるときは「まったり」となる。それはもちろん時代状況にも影響されます。いまはインターネットなど状況が整備され、アイデンティティは断片化している。しかし心理療法とか宗教とか、求心力を持ったアイデンティティへの希求は依然として求められている。どっちがどっちという問題ではなく、そのあいだを動いていく可能性がわれわれには示されているのではないか。橋爪さんがおっしゃられ

たように、両極があり、われわれはすでに両足を置いているんだという認識が必要なんです。ビンラーディンはその象徴ですね。原理主義と市場主義の両方の面を持っている。が、自分を物語るときに片足の部分しか強調しないところが欺瞞です。しかし、その両足の自覚こそが新しいアイデンティティへとわれわれを導くことになるはずなんです。

橋爪 そこに現代の秘密があるのでしょ

うね。

小泉は舞台裏も演出する

橋爪 最後に、日本のカリスマ、小泉首相についても話してみたいと思います。

なぜ小泉首相には七〇パーセント以上の支持、一時は九〇パーセントもの支持が寄せられたのか。これは、「アナクロ派」も「まったり派」も支持しているからでしょう。そうでなければこの支持率は出てこない。

具体的に見ていくと、八月十三日の靖国参拝。これは「アナクロ派」的に見える。ハンセン氏病控訴断念。これは「まったり派」、もしくは「脱構築派」に見える。構

造改革を断固やるその姿勢は「脱構築（まったり）派」。景気回復・失業対策については「共同体（アナクロ）派」です。たぶん本人はよくわからないでやっているのですが、両方が共存しているのは矛盾です。でも、本人には矛盾と感じられないよう、けろっとしている。本当はどっちなんだというところまで、考えないタイプなんですよ。これが小泉首相の政治家としての持ち味かもしれない。「アナクロ派」のロマンと「まったり派」のロマンのどちらも彼に自己投影できるので、支持されているという構造がある。

上田 たしかにそうですね。しかも靖国の件に関しては、参拝した後で韓国と中国に謝りに行っている。彼は明らかに断片人格

を使いわけています。それ自体がいまの社会にフィットしているようですが、ひとつひとつの断片人格から離れてよく見ると、彼は「アナクロ派」的な中心と周縁の論理によって統合された人格で立っているとした見えないですよ。構造改革という、反アナクロ派の政策にしても、「小泉か、反小泉か」というアナクロ的な布陣を引くことで、自民党内の中心性を確保しようとしている。この前の参院選なんて、周縁の議員も中心の小泉といかに近い距離にいるかを強調するわけで、笑止ですよね。

断片人格という意味で小泉さんは現代的な人格構造かもしれないが、政治家は社会の人格構造を表しているということではすまない存在ではないか。もしそれが統合さ

れるなら「アナクロ派」ではなく、もっとも高次の統合をしてもらいたい。もっとも、いまはまだ断片人格がばらまかれている段階ですが。

橋爪 閣僚たちが小泉首相の人格の断片を投影していて、わたしは最初、それを「七福神効果」と呼んでいました。はじめのうちはプラスだったのですが、最近小泉首相の分裂を加速させる結果になっているかもしれない。構造改革派の竹中平蔵、わけが分からない田中真紀子、共同体志向の強い麻生や塩川、腰くだけの石原伸晃、いろんな大臣が小泉首相に自分の共通点を見出して、チームを作っている。そのうち具体的政策をめぐる、閣僚と閣僚とのあいだの齟齬が起るんだが、それが単に人間関

係でそうなるより、小泉改革が本来的に持っていた多面性があらわになる形でよくしやくしてきている。それが興味深い点です。

国債三十兆円枠の問題があり、もう一段の景気対策を進めるのか、構造改革で失業者が増えても仕方がないのか、の岐路に立たされています。「アナクロ派」と「まったり派」を足して二で割る政策が最悪だということもわかっている。どちらかにはつきりさせないといけない。来年度の予算編成が正念場ですね。ここで小泉がどの程度の統治能力を持っているのか、「アナクロ」と「まったり」をアナクロ的に統合させただけの人なのか、それともなにか隠し球をもっているのか。

上田 小泉首相はしたたかなカリスマですね。自分にとっての踏み絵だった森派の会長をやりきった。あの森首相を最後まで支持し続けたわけですからね。そして「自民党のなかに小泉を引きずりおろしたがってやるやつがいる、じつはわたしは孤立無援だ」という発言を繰り返す。国民は、自分たちが小泉を支えてやらないと、邪悪な自民党の守旧派にやられてしまつて、小泉さんかわいそう、と思う。われわれのほうが

小泉の取り巻きよりも彼自身を理解しているのではないか。いわばスターがマネジャーに苛められていても、ファンの方が彼の真情は自分こそが理解している、がんばつてねと考える気持ちと同様です。つまり舞台裏まで見せる構造において、いかに自分がヴァルネラブルな存在であるかを強調しているわけですね。

事態は輻輳しています。舞台裏を見せずにおもて面だけでやっているカリスマがいる一方、舞台裏を見せるカリスマもいる。そして小泉首相は、舞台裏を見せてなおかつそれを演出しているカリスマでしょうね。演出家とか舞台監督にまかせたりせず、踊りながらメーリング・リストを出しつづける。つまり舞台裏の弱さまで演出しているんです。ただ、その演出はうまいけれど、橋爪さんが言われた、「アナクロ」と「まったり」の選択、あるいは統合については、演出術を持っていないように見える。

橋爪 自民党の政治家でそこまでやりきった人はいなかった。たとえば加藤紘一は、ホテルの控室で、行くの行かないの、男の涙といった安芝居を演じてしまった。舞台裏を演出しなければという自覚すらない。

要はまるだしのアナクロなんですよ。効果もわからず、無防備に見せてしまふ。小泉はそれに比べれば計算できる人、垢抜けていてかなりのものです。

上田 しかし、その計算が見えてきているので、例えば塩爺を盛り上げる運動にしても何か仕込みがあるんじゃないか。そういう疑いさえ感じてしましますよね。

橋爪 組閣・党役員人事のときのインスピレーションは凄かったですね。可能な限り、従来とは違ったやり方で行った。そのほうが支持されるとわかっていたから。そしてこの方法に、二回目がないこともよくわかっていて、内閣改造の圧力に抵抗している。

上田 田中康夫と石原慎太郎の両者を具現してしまつたところがある。もともとこの両方を併せ持つことはこの二人自身には不可能なのに、何故か小泉首相は奇跡的にいいとこ取りをしている。石原慎太郎首相待望論が小泉首相になつてから盛り上がりがないのはそのせいでしょう。田中康夫知事が中央に楯突く姿勢も小泉首相が相手では今ひとつ盛り上がりがない。

橋爪 そうすると小泉を支える力学は、自

民党を出て一緒にやろうという民主党と、対抗しつつも公明党との角逐のなかで小泉が出て行つたらどうしようと考えてる守旧派の小泉抱き込みという力関係のなかで、「副官はどっちだ」というナポレオン・ゲームみたいなパワー・ゲームですね。民主党が「まったり」で自民党が「アナクロ」だとするなら、さきほどの認知構造と対応しているところがある。

上田 小泉首相は自分が国民に愛されていると思ひこんでいる。自民党の守旧派からは憎まれていても、世界とは一緒に呼吸していると思っているわけですね。しかし今後の政策決定としては二律背反しているものをやればどちらにも行かないわけで、実行過程のなかで果たしてうまく行くのだろうか。これはね、長嶋茂雄というカリスマが巨人という球団の矛盾を隠蔽していたのと同じような構造なんです。小泉さんは政策面の矛盾という下部構造をカリスマという上部構造で隠蔽しているわけで、自分自身が上下で分裂しているわけだから大変ですよ。

橋爪 うまくやるにはスタッフを充実させて、「アナクロ派」と「まったり派」の両

方を取りそろえ、その都度どちらで行くかはひらめきで決める。これしかない。その決断の瞬間まで、考えないこと。この「考えない」は、小泉の特徴でしょう。

上田 まあ、長嶋さんも「考えない」のが特長だと言われてましたからね。しかし、構造改革で多くの人々が弱者になるのが確実なのに、小泉さんの手でよくなるとみんななんとなく信じ込んでいます。このマジックが凄い。

橋爪 特殊法人がバラバラになったり、銀行の部長クラスがリストラされたりして失業率が上がつても、みんな喜ぶばかりです。同情なんかしない。ところが経済は繋がっているから、贅肉が削ぎ落とされると、まともな部分もおおきく受けてしまう。その切り分けが大事ですね。つぶす特殊法人はつぶし、そして、すみやかに手をさしのべる側にも廻る。その雰囲気さえあればいい。実際に実行しなくても、小泉のパフォーマンスで人びとが満足するしたら、これは政治ではなくて、宗教ですね。これだけ実体経済が落ち込み外交の失敗が続くなら、もうその域に達しているっていい。

上田 さっき指摘した、「アナクロ」と「ま

ったり」を意識しながら、その両極の間を動いて行くということ。いまの政治の構造はそれから遠ざかっている気がしますね。その両方が同時に来るんだという幻影を与えてしまつてますからね。それは結局はごった煮になつてしまふ、その両極に引き裂かれた現代の苦悩にも向かい合わず、それ故にその構造を超えていく未来はそこからは生まれません。

橋爪 しばらく前、二大政党をどうつくるか、政策の対立軸は何かと論じられたことがありましたよね。わたしはいまわかった。日本「アナクロ派」と、日本「まったり党」でいいんです。共産党と公明党と自民党本体は、「アナクロ派」に結集していただく。小泉首相は、持ち前のとっさの直感で強引に解散し、政界の「まったり派」をかき集めて選挙に討つて出る。菅さん、鳩山さん来なさい、加藤紘一さんも来なさいと、「小泉公認」を乱発する。そうすれば、すんなり二大政党制が実現しますよ。

冗談はともかく、ポスト小泉には、政界も知識界も現実世界も、すべての場で火花を散らすような対立軸をつくれる、まともな人物に登場して欲しいものです。